■第 21 回大会関連

■日中社会学会 21 回大会に向けて

中村則弘（愛媛大学）

名古屋大学にて第 21 回大会を開催することとなった。プログラムは，別添されることとなるだろうが，関係者のご努力にまずもって深い感謝の意を表したい。

これまでの大会において，名古屋での開催は一度も無かったと思う。中京圏に在住する会員はかなり多い。また，中国との関係でも，重要な意味をもつ土地柄である。21 回目という，いわば開催の第 3 クールの出発点を名古屋で行うことは，記念すべきことがらではないだろうか。これを機会に，本学会における取り組みへの決意も新たなものになればと思う。

今回の大会では，折原浩先生の特別講演が設定されると聞き及んでいる。先生はウェーバー研究，理論社会学の大家である。とりわけ若い時、先生の著作からずいぶんと啓発を受けた思い出がある。いうまでもなく，ウェーバーにかかわる研究は，われわれが中国，アジアをみてゆくときの重要な出発点と考えてもよい。その折原先生に直接お話を聞かせていただけるということは，とりわけ若手の各位にとって望外の喜びと言う他ないと思う。先生がご高齢であることは承知しており，その思いは格別である。

温故知新というと，勿体をつけたような趣を感じてしまう。しかし，良い言葉である。折原先生のご講演と言う事を聞き，どうもわれわれは「知新」ということに流されがちであり，「温故」を忘れがちになっているのではと思い至った。時代の趨勢であり，やむを得ない面もある。しかし，行き詰まりが感じられる時代状況を打ち破るために大事なのは，ちゃんと「温故」ができていたかどうかのように思えてならない。折原先生のご講演は，この面でとりわけ意義深いものと位置づけられるだろう。

改めて，本大会の名古屋での開催は，少なくとも中国との関係では「知新」の最前線の土地で，「温故」を活かしたものとなる。考えてみれば、折原先生のウェーバー研究は、「温故」と「知新」を見事に結んだものに他ならない。素晴らしき巡り合わせを感じてしまう。その成功を願ってやまない。

■日中社会学会第 21 回大会をお受けするにあたって

黒田由彦（第 21 回大会実行委員・名古屋大学）
西原和久(第 21 回大会実行委員・名古屋大学)

伝統ある日中社会学会の第 21 回大会を、私どもの名古屋大学で開催できることを大変、光栄に思います。

名古屋大学の文学部社会学研究室は、今年で
設立 60 周年の節目を迎えます。これまで、名古屋大学は、文学部においては、初代の本田喜代治教授のあとも、阿閉吉男教授、折原浩教授など日本の理論社会学の柱となる教授陣を有しておりました。また、文学部の北川隆吉教授、旧教養部（現在の情報文化学部）の中田実教授、今年定年で退任された貝沼洵教授などの教授陣も、理論と実証の結合に努め、地域研究にも大きな足跡も残してきました。

2001 年、名大の社会学は文学部と情報文化学部（旧教養部）が大学院レベルでは統合され、大学院環境学研究科の社会環境学専攻・社会学講座として、あらたな一歩を踏み出しました。そして本年度のはじめには、念願であった文学部社会学教員と情報文化学部社会学教員が同じ研究棟の同じフロアに結集するができ、文字通り、社会学教員が一体となって、研究・教育にあたる新たな土台ができました。

現在、名大大学院の社会学講座は、8 名の専任（欠員 1 名含む）と助教の 9 人体制で運営されております。院生は、OD 等を含めて総勢で 40 名余りおります。大学全体としては、さらに国際言語文化研究科、教育発達科学研究科、国際開発研究科などにも社会学の教員や院生がおり、来年度には日本社会学会の年次大会の開催が決まっています。

とはいえ、名大社会学の中核となるべき、私どもの社会学講座は、理学系、工学系、そして人文社会科学系の 3 つの専攻からなる文理融合の大学院である環境学研究科に属しています。学部教育は、それまでの所属学部で行っているために、残念ながら、この 3 専攻の研究室所在地は、分散を余儀なくされています。かろうじて現在、「環境総合館」という共通の研究・事務棟が確保され、教授会等の会合はこの建物で行われます。設備の点など諸般の事情を考慮して、日中社会学会第 21 回大会は、この環境総合館をメイン会場として開催することにしました。何かとご不便をおかけするのではないかと恐れておりますが、どうかこのような事情をご賢察の上、ご寛恕いただければ幸いです。

さて現在、私どもの社会学講座には、中国からの留学生だけでも、研究生等も含め 10 名を超えます。これまでに学位を取得し中国の大学教員になった者もおります。これから大学院を目指そうとする学部の中国人留学生もいます。留学生 30 万人計画が現在進行中で、今後さらに留学生が増えると予想され、大学の国際化が求められているわけですが、研究・教育の質を落とさずに、いかに大学の扉を諸外国に開いていくのかが、いまわれわれに問われています。

私見ではありますが、日本の大学は、大学院レベルではだいぶ変化してきたとはいえ、まだまだ諸外国に閉ざされた状態にあります。否、大学だけでなく、日本全体が、外国人労働者等の問題を考えてみれば分かるように、閉ざされた状態にあります。第二の開国の必要性が語られるゆえんです。こうした一種の閉塞状況を、政財界に任せておくのではなく、学会が率先して打ち破り、日中、あるいはアジアの連携を模索することも重要な課題だと思われます。日中社会学会の伝統は、まさに、そのさきがけとなるものです。国境を超えた学術交流を目指す日中社会学会大会の開催に、私どもも微力ながら協力させていただきたい、と考えている次第です。

（文責・西原和久）

〈第 21 回大会開催要項〉

日時：2009 年 6 月 6 日・7 日
会場：名古屋大学環境総合館 1 階
　　レクチャーホール
参加費：一　般　2,000 円
　　学　生　1,000 円
　　非会員　1,000 円
懇親会費：　5,000 円（一般）
　　2,000 円（学生・退職者ほか）
懇親会会場：レストラン花の木
　　(052-783-8707：大会会場のすぐ近くです。)

■日中社会学会第 21 回大会
**　開催校の連絡先**

（黒田由彦）
464-8601　名古屋市千種区不老町
　　名古屋大学情報文化学部
　　黒田由彦研究室
メールアドレス：
　　f43839a ＠ cc.nagoya-u.ac.jp
電話　052(789)3507
Fax　053(789)4821
(メールアドレスは@を半角にして前後の空白を取ってください)

■大会担当実行委員の連絡先

（西原和久）
464-8601　名古屋市千種区不老町
　　名古屋大学文学部
　　西原研究室
メールアドレス：
　　n47178a ＠ cc.nagoya-u.ac.jp
電話／FAX　052(789)2273
(メールアドレスは@を半角にして前後の空白を取ってください)

■第 21 回大会　論著資料の配布コーナー及び書籍販売コーナー設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

大会参加者相互による論著資料の配布コーナー（受付付近）を設置します。

是非、論文、研究報告書など、お手元にある論著資料をご持参ください。論著資料は、抜刷、コピーどちらでもかまいません。設置コーナーにて配布していただきます。

また、会員諸氏の著書などをそれぞれ持ち寄っていただき、販売する、書籍販売コーナーも設置します。情報交換や研究成果のアピールの場として、この機会を是非、ご利用ください。

■第 21 回大会　中国の大学・中国の研究機関紹介コーナーなど設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

中国の大学・中国の研究機関の紹介コーナーを設置いたします。中国の大学・研究機関に関する資料やコピーなどを、みなさまから持ち寄っていただき、学会参加者のあいだで情報交換することを目的とします。海外を活動拠点とする「在外会員」との研究者ネットワークの構築や留学先の情報収集など、幅広い研究者・研究交流のきっかけとなることを願っております。

また、若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介などに関する資料配布コーナーも設置します。ご希望の方は大会当日、関係資料を持参の上、当コーナーにて展示、配布するなど、各自ご利用ください。

日中社会学会第 21 回大会プログラム

開催日：６月６日（土）・６月７日（日）
会場：名古屋大学環境総合館レクチャーホール

（注）プログラムは一部変更となる場合があります。
当日会場にて配布される資料でご確認ください。

第１日　６月６日（土）

12：00～　　受　付

13：00～13：05　開会式

会長挨拶　　中村則弘（愛媛大学）
司　　会　　首藤明和（兵庫教育大学）

13：10～15：10 特別講演

「マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学における欧米とアジアとくに中国」

講　　演　　折原　浩（東京大学名誉教授）
司　　会　　西原和久（名古屋大学）

15：30～17：50　シンポジウム PART１「新しい段階に入った日中交流の現在」

報告者
林　麗（中国大使館参事）　「日中関係の現在」
西原和久（名古屋大学）　「長野県八ヶ岳東南麓の外国人研修生
――日中／アジアへの新しい視点――」
南　誠（日本学術振興会・民族学博物館）
「日中関係と『中国帰国者』――『中国残留日本人』の
過去、現在と未来を手掛りに考える――」
コメンテーター　浅野慎一（神戸大学）
司　　会　　黒田由彦（名古屋大学）

18：00～20：00　　懇親会

受付の近くにて

○　論著資料の配布コーナー（論文の抜刷やコピー，調査報告書などの配布）
○　書籍販売コーナー（著者割引での販売など）
○　中国の大学・研究機関紹介コーナー（資料やコピーなどを置いておく）
○　その他（若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介など）

第２日　６月７日（日）

9：00～　　受付

9：30～12:00　　一般自由報告

司　会　　首藤明和（兵庫教育大学）

1）鄭　南（中部学院大学）
「中国におけるキリスト教の発展と社会福祉―撫順のあるキリスト教会を事例として」
2）李明伍（和洋女子大学）　「『顔』論的アプローチの意義と課題」
3）梁　萌（名古屋大学）
「日本人論の受容と批判――現代中国知識人における対日意識の一断面」
4）宮内紀靖（瀋陽師範学院）　「中国社会の変遷と将来」

13：00～13：40　　総会

13：50～17：10　シンポジウム PART２　「日中社会学叢書の成果・課題・展望」

司　会　　永野　武（松山大学）

はじめに）日中社会学叢書についての紹介
監修者代表：中村則弘（愛媛大学）

1）中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化』
評　者：首藤明和（兵庫教育大学）
王　向華（香港大学）

2）石井健一・唐燕霞編『グローバル化における中国のメディアと産業』
評　者：本田親史（明治大学・法政大学）
田中重好（名古屋大学）

3）黒田由彦・南裕子『中国における住民組織の再編と自治への模索』
評　者：陳　鳳（姫路獨協大学）
長田洋司（早稲田大学）

4）首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族』
評　者：金戸幸子（京都大学）
鈴木未来（新潟福祉医療大学）

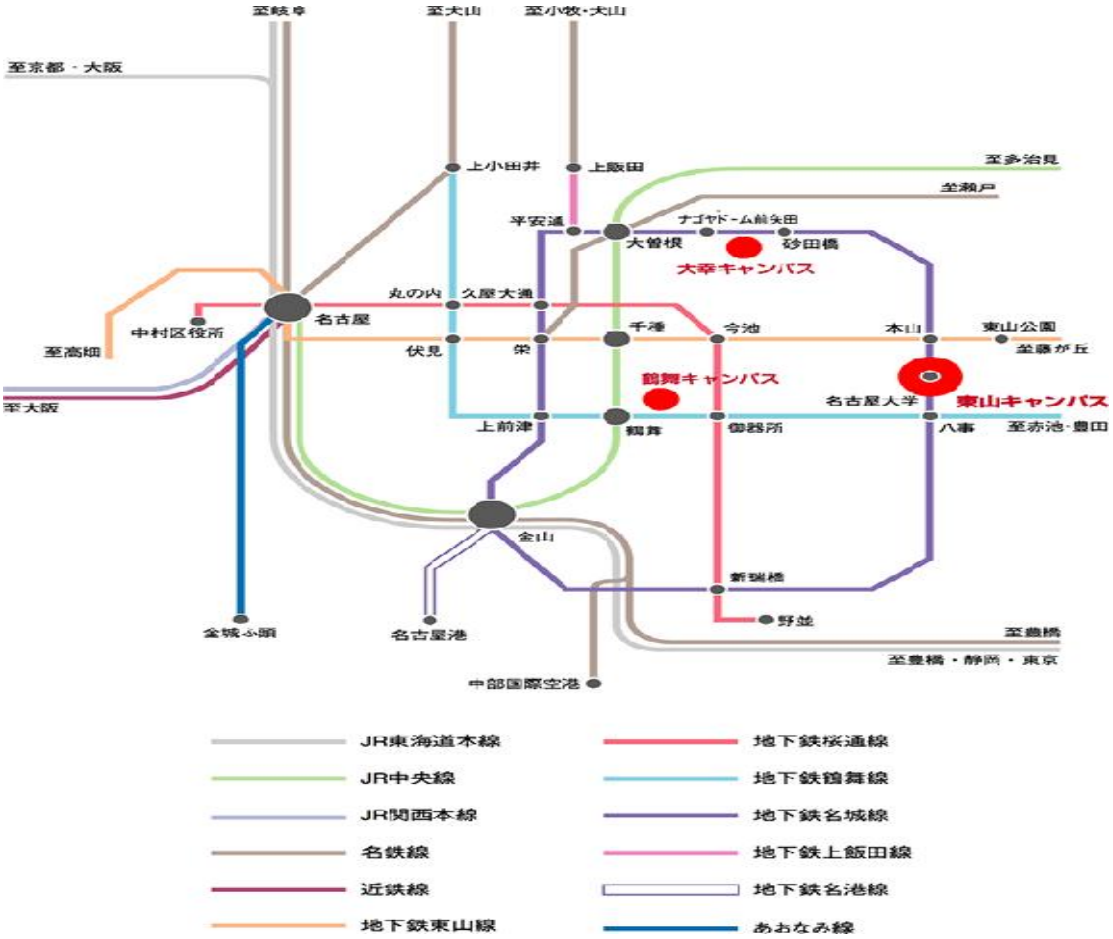
5）袖井孝子・陳立行『転換期中国における社会保障と社会福祉』
評　者：賽漢卓娜（名城大学・豊田地域看護学校）
松戸庸子（南山大学）

おわりに）監修者による全体的なリプライ

17：10～１7：20　　閉会挨拶

大会担当理事　　浅野慎一（神戸大学）・西原和久（名古屋大学）
大会実行委員　　黒田由彦（名古屋大学）・西原和久（名古屋大学）

■会場（名古屋大学・東山キャンパス）へのアクセス



名古屋駅からは、下記の２つの方法があります（栄付近に宿泊の場合は、②が便利です）

①地下鉄東山線→（15 分で）「本山」駅・地下鉄名城線（右回り）に乗り換え
→（3 分で）「名古屋大学」駅着
②地下鉄東山線→(5 分で）「栄」駅・地下鉄名城線（右回り）乗り換え
→（約 20 分で）「名古屋大学」駅着

「名古屋大学」駅は大学のキャンパスの真ん中にあります。「名古屋大学」駅に着いてからは、２番（No.2）の出口に出て、本山方面（北方向）に３，４分歩きます。途中すぐに、「名古屋大学内郵便局」があり、そこから２本目のコーナーを右折し、緑の林の中の少し上り坂の道を３分ほど、歩きます。そして右手に「環境総合館」入り口があります。（なお、エスカレーター・エレベーターをお使いになりたい方は、3 番出口
から出られますが、道路を渡る必要があります。）

下記のキャンパス地図では、「４７」の建物が「環境総合館」です。

↓４７：環境総合館　（⑨は懇親会場）

■ホテル

名古屋大学のすぐ近くには、残念ながら、ホテルがありません。

比較的近くでは、

○名古屋大学駅から２駅の「八事（やごと）」駅に直結する
「サーウィンストンホテル」（052-861-7901）がありますが、少し高めです。

○名古屋駅から本山乗り換えになりますが、千種区には、地下鉄東山線の
「池下駅」近くのルブラ王山（052-762-3151）、および
「千種（ちくさ）駅」近くのメルパルク名古屋（052-937-3535）がリーズナブルです。

しかし、「栄駅」周辺（および「伏見駅」）には、各種のたくさんのホテルがあります。
各会員の好みや予算に応じて選ぶことができます。また時間的にも、栄駅から名古屋大学駅までは、地下鉄名城線を使えば、直通で約２０分（２６０円）で着きます。

もし、ホテルが見つけにくい場合には、大会実行委員宛にご連絡下さい。